

# 北朝鮮における住民統制の混乱と住民意識の変化

法学部政治学科4年 簗島功一

## 目次

はじめに

### 第1章 北朝鮮当局による住民の統制政策

1. 組織生活における思想教育
2. 監視制度
3. 情報統制政策

### 第2章 統制政策の混乱

1. 国内情勢の悪化と市場の開放
2. 外部情報流入の過程

### 第3章 北朝鮮住民の意識・価値観の考察

1. 北朝鮮当局に対する住民意識・価値観
2. 韓国に対する住民意識・価値観
3. 日本に対する住民意識・価値観

おわりに

参考文献

## はじめに

朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）は世界の中でも極めて稀な国である。際たる特徴として金日成、金正日、金正恩と3代に続く最高指導者による独裁政権であろう。彼ら指導者が住民に対して厳しい統制を課すことで住民の生活を細部までコントロールが可能となり、現在まで体制を維持してきたことは周知の事実となっている。2006年、2012年、2015年にジャーナリスト保護委員会（CPJ）が発表した「検閲国家ワースト10」において、北朝鮮はそれぞれ1位、2位、2位と常に上位に位置している。加えてCPJは、北朝鮮について「同国の憲法67条は報道の自由をうたっているが、ほぼ全ての新聞、雑誌、テレビの報道内容は、政治指導者の声明や活動に焦点を当てた朝鮮中央通信からの配信だ」と説明している。こうした事実を踏まえ、我々一般人が北朝鮮住民を外側から見ると、「指導者に洗脳され、忠誠を尽くし続ける」であるとか「外国の発展ぶりを今でも知らず、自国が最も繁栄していると本気で信じている」といった住民像を思い浮かべてしまうことが多いのではないか。しかし、こうした考えを改めなければいけない報道が散見される。テレビや携帯電話の流通を通して、北朝鮮住民が外部情報にアクセスできるようになったというのである。私自身、これまで無知だと考えられていた北朝鮮住民が、実は自らを客観視できるようになったのではないかとといった点に興味・関心を抱いたことが本論文の執筆に至った動機である。

そこで本論文では、北朝鮮国内における住民統制に注目して、北朝鮮当局がどのような統制方法によって住民をコントロールしてきたのかを明らかにするとともに、近年こうした統制にどのような混乱が生じているのか、混乱を受けて北朝鮮住民の価値観や意識にどのような変化があるのかを考察することを目的としている。研究手法としては、書籍や学術論文、ウェブサイトを参考文献として研究を行った。文献の中で特に着目したいのが、脱北者による証言である。閉鎖的な体制のために市民に関する資料が極端に少なく、住民の意識や価値観にアプローチする上では、彼ら自身が経験した情報が重要な手がかりとなってくるからである。また近年の情報については、主にデイリーNK ジャパンとアジアプレス・ネットワークという2つのウェブサイトを参照した。前者は高英起氏が編集長を務

める北朝鮮情報専門サイトであり、後者はジャーナリスト集団が運営するウェブサイトである。両者とも独自の情報網によって、北朝鮮内部における住民生活について詳細な情報を報道している。そのため信頼のおけるメディアと判断し、今回の論文執筆にあたり参考にした。

本論文の構成としては、まず第1章ではこれまで北朝鮮当局が体制を維持するため、どのように住民を統制してきたのかを具体的な政策をあげて整理し、現在までの北朝鮮体制の維持に大きな役割を果たしたことを明らかにする。続く第2章では、第1章で整理した統制政策に近年綻びが生じていることを具体的な例を挙げて整理し、北朝鮮内部における統制が緩むこととなった過程を明らかにする。そして第3章では、北朝鮮住民が北朝鮮・韓国・日本に対してそれぞれにどのように認識しているのか、どのような価値観を有しているのか、を考察する。

## 第1章 北朝鮮当局による住民への統制政策

### 1. 組織生活における思想教育

本節では、「組織生活」を中心に北朝鮮住民の生活において、どのような思想統制がなされているのかを明らかにする。「組織生活」とは、公的制度・組織における朝鮮労働党の指導下・管理下の生活のことを指す。根底にある考え方としては、全ての北朝鮮住民は何らかの「組織」に入らなければならない、「組織」が住民の社会活動を管理・指示するというものだ。どの公的組織にも属さない者は、「無頼」という範疇が適用され、潜在的に不穏で反社会的な存在として見なされる。では、実際に北朝鮮住民が所属する組織にはどのようなものがあるのかを時系列で説明する。まず、満7歳から13歳までの男女が登録するのが「少年団」だ。少年団への加入は、各学年で一斉に行われるものではなく、優れた子供から優先的に入団が決まる。この少年団では、農繁期の農作業や平壤での外国客訪問時に歓迎のための動員など課外活動を通して、組織生活の基礎を身につける。中等高等学校の2学年である14歳になると、北朝鮮の男女全員は「金日成・金正日主義青年同盟<sup>1</sup>」（以下、青年団体）に加入し、原則として30歳まで活動を行う。学生をはじめとした若

---

<sup>1</sup> 2016年8月の第9回青年同盟大会にて、「金日成社会主義青年同盟」から改称

い世代で構成される青年団体は、党に対する忠誠度、政治行動力の点で最も重要な役を担っているとされ、北朝鮮社会における体制維持の中核的な勢力であることがわかる。30歳を超えると住民は職業毎に分けられ、事務員及び労働者は「朝鮮職業総同盟」に、農業従事者は「農業勤労者同盟」にそれぞれ加入する。どちらの団体も65歳まで所属することとなる。また30歳を過ぎ、職場に出なくなった主婦を含む女性たちは「朝鮮社会主義女性同盟<sup>2</sup>」への加入が義務付けられ、これまでの組織活動と同様に金日成主席に対する忠誠の証として課される課題を遂行しなければならないとされる。以上、一般的な北朝鮮住民が一生において加入する具体的な組織・団体を紹介してきた。こうした組織を傘下に有し、社会を指導・管理する存在が、「朝鮮労働党」である。党員資格は18歳以上であるが、党員になるには簡単ではない。入党希望者は、2年以上の党歴を有する2人の党員の推薦を得て入党手続きを行い、1年間の党員候補を経て再審査を受けた後、正式な入党が認められる。ただ、出身成分が悪いものは、党員申請すらできないとされている。出身成分とは、北朝鮮における階層制度及びその階級を指す。その中で大きく分けられる3大階層は「核心階層」「動揺階層」「敵対階層」に分けられる。そのうちの「核心階層」とは、解放以前の労働者や貧農、革命遺家族（反日闘争犠牲者の遺家族）朝鮮戦争の戦死者家族などで、現政権を無条件に支持すると思われる階層である。党員になれるのは、原則としてこの核心階層の人々のみであるといわれている<sup>3</sup>。

続いて各団体において、どのような指導・管理がなされるのかを具体的に整理する。基本的に組織生活では、それぞれの団体において週3回程度の長時間にわたる会議が行われる。うち2回は思想教育がなされるという。例えば、朝鮮労働党のこれまでの功績や金日成をはじめとした金一族の偉大さ、経済の比類なき成長を住民に学習させ、党への忠誠教育を施す。残りの1回は「生活総和」と呼ばれる批判集会である。これは、その週の自らの欠点や過失、他人の過ちについて自己批判と相互批判をし、改善方法を討論するものであるという。この際、批判の基準となるのが、「党の唯一領導確定の体系10大原則」<sup>4</sup>に基づいて金日成・金正日が指示または指摘をした「教示」及び「お言葉」資料の内容であるという。これらを引用し、自らや他人の欠陥の該当する箇所を自己批判、相互批判する。1999年に脱北した金起成氏によると、「耐えられないのは、同僚同士、知り合い同士がお互いの間違いを面と向かって批判しなくてはならないこと<sup>5</sup>」であると生活総和について述

---

<sup>2</sup> 2016年11月の朝鮮民主女性同盟第6回大会にて、「朝鮮民主女性同盟」から改称

<sup>3</sup> 香川正俊(2012)「北朝鮮の政治体制と先軍政治」p14

<sup>4</sup> 2013年、金正恩第一書記によって、「党の唯一思想体系確立の10大原則」から改定

<sup>5</sup> 金起成(2004)『ボクが捨てた「北朝鮮」生活入門』p54

べており、人目を気にして生活することに腐心していたという。こうした証言からも、「生活総和」が北朝鮮住民を相互監視・統制するシステムとして機能していることが分かる。

## 2. 監視制度

本節では住民同士の監視制度である「人民班」の役割を整理することで、住民統制がどのように機能しているのかを明らかにする。上述した「朝鮮職業総同盟」や「農業勤労者同盟」などが職業を単位としているのに対し、「人民班」は、近隣の20～40世帯で構成される住居を単位とした組織である。基本的に班への加入を逃れることはできず、年齢性別を問わず、北朝鮮住民みなが所属している。この組織の目的は、住民の監視である。人民班には、「班長(職業を持たない女性党員または幹部の夫人)、世帯主班長、衛生班長(環境・清掃担当)、扇動員(人民班の党分組長を兼任)、秘密情報員(国家 安全保衛部および人民保安省が配置)などの監視・監督員がおり、これらの監視・監督員が、住民の生活指導や思想動向の把握などの日常生活の把握および指導を行なっている」という。人民班長を担ったことのある脱北者によると、「人民班長は、数十世帯を手のひらにのせて生活一部始終を把握して思いのままにし、上の期間や保衛部や保安署(警察署)の指示を受けて、班構成員の一挙一動を統制し通知して申告することもある恐ろしい存在」であると証言<sup>6</sup>しており、北朝鮮住民は、身の回りの生活において、常に密告を恐れながら生活をしているのである。また、人の移動の管理という点においても、人民班は大きな役割を担っている。班長が毎晩記入する記録簿には、班員の家に泊まる訪問者を全て記載することとなっており、もし他の市や郡からの方が泊まる場合、旅行許可証の確認も行い、訪問者の身元を確認する。また、人民班長は、夜中に行う宿泊検閲においても責任を有する。家にいる人全員が正しく登録されているか、外国の放送を聞けないようにラジオがハンダづけされているかなどを確認する。

## 3. 情報統制

前節までは、住民の生活における統制制度について詳しく見てきた。本節では情報とい

---

<sup>6</sup> 伊藤亜人(2017)『北朝鮮人民の生活－脱北者の手記から読み解く実相』p116

う観点から、北朝鮮当局が住民にどのような統制を課しているのかを明らかにする。

独裁政権を維持するためには、情報の統制は非常に重要である。というのも、政治および社会の矛盾を覆い隠すのに、国民に対し政権の都合の良い情報のみを発信し、独裁者への忠誠を誓わせる必要があるからだ。北朝鮮においても同様に、「情報統制」は体制維持の重要な要素となっていると考えられる。それでは、北朝鮮国内で行われている情報の統制を具体的に整理する。

北朝鮮当局における情報統制には、主に2つの手法が存在する。1つ目の手法は、外部情報の流入阻止である。すなわち、北朝鮮住民が自らの置かれた状況を客観的に知るための情報へのアクセスを阻止することを指す。具体的には、テレビ・ラジオにおける海外放送の視聴・聴取の禁止が挙げられる。1960年ごろから、住民に外国の放送を聞かせないため、ラジオのチューナーを自由に動かさないもののみを販売するようになったという。ただ外貨ショップや外国においては、チャンネルを自由に動かせるラジオの購入は可能であるが、その場合警察に持っていきチューナーに加工をしてもらわなくてはならない。もし国外の放送を視聴していることが露見すると、強制収容所へ送られることになる。また、住民が外国人と交流することも制限されているという。2018年から2019年まで金日成総合大学に留学していた経験を持つオーストラリア人、アレック・シグリー氏によると、

「北朝鮮政府はすべての外国との接触を「思想的浸透」であると考えており、訪問する外国人たちの自由行動と現地人との接触を厳格に統制している<sup>7</sup>」と説明する。すなわち北朝鮮住民が外国人と接することで、当局に好まざる情報を得てしまう可能性を恐れているのだ。さらに、「留学生は現地の学生と同じ講義を聞くことはできず、同じ教室を使うことはない」「留学生はすべての外国人と同じく、一般住民の家を訪問することはできず、彼らに電話することもできない」と自らの経験を述べており、徹底した外国人隔離体制を築いていることがわかる。情報統制における2つ目の手法は、国内情報の操作である。北朝鮮国内でジャーナリストとして働いていた脱北者によると、「資本主義国、とりわけ1988年にオリンピックを開催した韓国で生じた景気の良い出来事は、何であれ割り引いた表現に焼き直された。逆に他国で生じたストライキ、災害、暴動、殺人事件についてはたっぷりと報道された<sup>8</sup>」という。やはり隣国である韓国における発展ぶりは、当局にとって住民から遠ざけなければならない情報であり、まさに国家が主導となって都合の良い情報のみ

---

<sup>7</sup> ハーバー・ビジネス・オンライン「北朝鮮の外国人留学生に与えられた“特権”とは？<アレックの朝鮮回顧録2>」2020.1.4

[https://hbol.jp/210006?cx\\_clicks\\_art\\_md1=5\\_title](https://hbol.jp/210006?cx_clicks_art_md1=5_title)

<sup>8</sup> バーバラ・デミック(2011)『密閉国家に生きる 私が愛して憎んだ北朝鮮』P75

を住民に発信している例であろう。国内から発信される情報の中で大きな役割を果たすのが、ほぼ全ての北朝鮮住民に義務付けられている朝鮮労働党中央委員会機関紙『労働新聞』である。宮田（2006）によると、労働新聞での報道の例として「農作物の収穫時には、あたかも豊作であるかのような写真が掲載される」「電力不足が周知の事実であるにもかかわらず、（中略）あたかも発電所が稼働しているかのように装う」と説明し、国内における情報の操作が行われているという。

以上第1章では、北朝鮮当局の徹底した統制システムを見てきた。「組織生活」に見られるように、北朝鮮社会においては、個人の意思に基づいた行動が最大限に制限されており、国家の一員として集団を優先して生活しなければならないことがわかる。また、「生活総和」や「人民班」からは、あらゆる場面において監視されることで、住民はいつ告発されるかわからない恐怖の中で生きていかなければならないことがわかる。外部からの情報を遮断し、恣意的な情報のみを住民に発表することで、情報統制が機能している。

## 第2章 統制政策の続び

### 1. 国内情勢の悪化と市場の開放

本節では、1990年代以降に生じた北朝鮮社会の混乱について具体例をあげて整理し、その結果厳しい統制がなされていた北朝鮮社会がどのように変化してきたのかを明らかにする。

北朝鮮国内に大きな変化が生じたのは、1990年代以降の経済難によってであった。1980年代後半から1990年代初めにかけて、ソ連をはじめとした社会主義国家が相次いで崩壊した。当時、貿易額の半分以上を占めていた対ソ連貿易は、ソ連が崩壊する1991年には約7分の1にまでに減少し、東欧諸国からの援助も激減した。これによって北朝鮮経済は大きなダメージを受けることになる。また1990年代中頃からは、「食料配給制度」が機能しなくなった。多くの脱北者の証言によると、食料配給は1992年に滞り始め、1993年8月には完全に停止したという。社会主義国家の相次ぐ崩壊と食料配給制度の破綻が大きな要因となって、1990年代中頃から、国内において大規模な飢饉が起こった。化学肥料や

農薬を大量に使用した誤った農業方法や段々畑方式の導入による無理な耕地面積の拡大といった国家の失政が、1995年の大水害と相まって、国内に大規模の食糧難が生じてしまったのである。大飢饉による正確な死亡者の数については、北朝鮮当局が統計を明らかにしていないために不明であるが、最低でも25万人、最大では300万であると推測されている。

共産主義下の北朝鮮において、市民が食料にアクセスできる唯一の手段が破綻したことは、北朝鮮住民の暮らしに大きな影響を与えた。国家から食料が与えられないままでは餓死するしかない北朝鮮住民は、生きる術として自ら生計を立てていかなければならない。そこで北朝鮮社会で拡大したのが闇市場である。従来、社会主義体制下においては、「商い」は個人的利己主義、他人を騙し奪う行為、資本主義の萌芽・温床であり反党的行為と見なされ。生活総和の場で批判の対象とされていた。しかし、配給制度が途絶え始めた頃から市場は急速に発展していったという。とりわけ「苦難の行軍」と呼ばれた1990年代後半は市場が急速に発展した時期であり、従来違法とされていた違法な商いがほぼ公然と行われるようになったという。「苦難の行軍」期を過ごした脱北者は「国民は一食のために寒い天気でもなりふり構わず市場に出ていかなければならず、市場に出ていかなければ飢えるほかなかった」「生活総和でいくら市場に行くのを抑制しようと試みても、生活に行き詰まった人々には効果はなかった」と証言<sup>9</sup>しており、北朝鮮住民が生き延びる手段として、市場に頼らざるを得なかった状況を示している。また、市場において商売を営んでいた脱北者は、「商売が活発になると生活力も高まった。配給を貰わなくてもびくともせず、(中略)工場からトウモロコシを少しずつ貰えるから「出てきなさい」と言われても出て行かなかった」という自らの経験<sup>10</sup>を述べており、市場の繁栄によって職場からの給料や配給に頼らずとも自立する住民も現れるようになったことがわかる。では、こうした事態に北朝鮮当局はどのように対応していたのだろうか。はじめは、統制経済を復旧するために市場での取り締まりや弾圧を行なった。しかし、統制する側である党員や政府組織の人々にとっても、食料をはじめとする物資の不足は喫緊の問題であり、統制の効果はあまりなかったとあっていいだろう。そこで、2002年7月1日に金正日政権は、「7.1 経済管理改善措置」(以下7.1措置)と呼ばれる経済政策を発表した。大幅な物価の引き上げや企業への裁量権の拡大、闇市場の閉鎖が主な措置であった。7.1措置の翌年2003年には、闇市場を「総合市場」に再編して設置し、商行為を合法化した。ここで重要なことは、北朝鮮当局が市場での活動を統制できないことを認めたことにある。

<sup>9</sup> 伊藤亜人(2017)『北朝鮮人民の生活－脱北者の手記から読み解く実相』p339-340

<sup>10</sup> 同上 p349-350



以上、1990年代からの社会の混乱によって生じた北朝鮮住民の生活の変化を見てきた。これまで国家による配給制度を頼りに生活してきたが、もはや市場なくしては生活できないのである。北朝鮮住民にとっての市場は、生きて行くための食料を買うための場所だけでなく、自ら店を出して収入を得る生活の拠り所として機能している。このような状況が引き金となり、最終的には北朝鮮当局も「市場」の存在を認めざるを得ない結果となった。

## 2. 外部情報流入の過程

前節では、食料配給制度の破綻や膨大な死者数を伴った大飢饉をはじめとした、1990年代から国内で生じた社会の混乱を明らかにしてきた。本節では、こうした社会の混乱によって、様々な形で外部情報が国内へ流入した過程について明らかにする。

外部情報の流入を明らかにする上で、まずは配給制度の破綻の影響で、国内での賄賂が横行したことに着目したい。配給制度で恩恵を受けていたのは一般の住民のみならず、国家に忠誠を尽くす軍人や党員、警察も同様であった。そこで彼らは配給なき世界を生きるために、環境の変化に合わせて自らの行動を変化させた。すなわち、賄賂を受け取ることによって違法行為を黙認するようになったのだ。北朝鮮では、自分の市や郡を離れて外泊する際、旅行許可証を申請する必要がある。しかし、警察に賄賂をいくらか<sup>11</sup>を渡せば、簡単に手に入るといえる。このような移動の制限が緩和されたことの帰結として、中朝国境の警備がほとんど機能しなくなったことが挙げられる。これを利用したのが密輸入業者であり、警備員に賄賂を渡して国境を自由に横断している。彼らが持ち込んだものの中にあっただのが携帯電話である。国境付近の住民が携帯電話を使用できるようになったことで、国外の人々と直接連絡を取ることが可能となった。また中国に逃れた脱北者が、残した家族と連絡を取るのにも利用されているという。ところが2004年4月、遠隔操作の携帯電話によって引き起こされたとされる龍川列車爆発事故以後、突然携帯電話の使用が全面的禁止された。しかし4年後の2008年には、国内で合法的な携帯電話サービスが開始され、アムネスティ・インターナショナルによると2016年時点における加入者は300万人にも及ぶという<sup>12</sup>。

---

<sup>11</sup> 賄賂の額は、宮田（2005）によると500～600ウォン、ランコフ（2013）によると2～3米ドルほどであるという。

<sup>12</sup> アムネスティ・インターナショナル（2016）『禁じられた通信 北朝鮮における徹底的

続いて、テレビやCD、DVDに代表される映像媒体による外部情報の流入過程について明らかにする。上述した7.1措置以降、海外製のテレビを総合市場で自由に販売することが認められ、韓国のテレビ放送を視聴する住民が急増したという。これは中国製の安価なテレビやCD・DVD再生機が大量に流入したことに起因するものである。しかし北朝鮮当局は、こうした映像機器自体への制限はあまり厳しくないという。金一族の伝記映画や思想的に健全な政府公認の映像を見ることを想定しているためであると思われる。ところが、大半の北朝鮮住民が視聴しているのは、韓国の映画やドラマの海賊版のビデオCDやDVDであるという。中国の商売人が北朝鮮に渡って、複製した韓国ドラマや映画の海賊版を売りさばっている。こうしたコンテンツは、北朝鮮住民にとって非常に人気であり、商売人は莫大利益を得ることができるのである。こうした外部情報の流入に対し、北朝鮮当局も取り締まりを強化するのだが、あまり効果はない。というのも商売を統制する保安署、保衛部、検察などの権力層に賄賂を渡すことで、密輸商人は安全な商売の保護をもらうといったお互いの利益を得るために共存関係にあったと言えるからだ。近年では、経済的に裕福な層を中心にコンピューターが普及しており、USBを利用した韓流ドラマの視聴が盛んになっているという<sup>13</sup>。USBは小型で携帯しやすいうえ、保安機関の取り締まりを避けることが容易なためであると予想される。直近の金正恩政権下では韓流をはじめとした外国情報の流入に対し厳しい取り締まりが進められており、2020年12月4日の最高人民会議常任委員会において、「反動的思想・文化排撃法」が採択された。同法27条には「南朝鮮の映画、録画物、編集物、図書、歌、図画、写真などを直接見たり聞いたり保管したりした者は5年以上15年以下の労働教化刑（懲役刑）を宣告され、コンテンツを流入させ流布した者は、無期労働教化刑（無期懲役刑）や死刑など最高刑に処す<sup>14</sup>」と示されている。また石丸次郎氏によると「韓ドラ根絶を命じた金正恩氏」との見出しで、「子供の名前を韓国風につけたり、韓国の言葉遣いをまねたりするなど傀儡文化に染まる現象が少なからず現れている<sup>15</sup>」と金正恩氏の発言を紹介しており、韓国からの情報が北朝鮮住民の価値観に強い影響を与えることを警戒していることがわかる。

---

な情報統制』p13

<sup>13</sup> Daily NK Japan 「北朝鮮の若者に「USBメモリ」が大人気」2014.6.3

<https://dailynk.jp/archives/17864>

<sup>14</sup> デイリーNK ジャパン 「有名女優も処刑…北朝鮮「性録画物」摘発で死屍累々」

2021.1.23 <https://dailynk.jp/archives/137194>

<sup>15</sup> アジアネットワークプレス 「「愛の不時着」は北朝鮮でも流行るか 越境する韓ドラに心揺さぶられた北の人々」2020.11.30

以上第2章では、1990年代からの社会の混乱によって生じた北朝鮮住民の生活の変化と外部情報の流入過程について見てきた。これまで国家による配給制度を頼りに生活してきたが、もはや市場なくしては生活できないのである。北朝鮮住民にとっての市場とは、生きて行くための食料を買うための場所だけでなく、自ら店を出して収入を得る生活の拠り所として機能している。このような状況が引き金となり、最終的には北朝鮮当局も「市場」の存在を認めざるを得なくなった。その結果2000年代初め以降、中朝国境をたどって、携帯電話や海外製テレビ、観光ドラマや映画のCDやDVDが流入した。こうした流入に対して、北朝鮮当局も厳しい取り締まりを行なっていることから、韓国からの外部情報が体制の動揺や崩壊に大きな要因となることに強い危機感を感じていることがわかる。しかし、一度流入し拡散してしまった情報は決して根絶することはなく、今後もさらなる外部情報が北朝鮮国内に流入することが予想される。

### 第3章 北朝鮮住民の意識動態

#### 1. 北朝鮮に対する住民意識・価値観

本節では、北朝鮮の住民が北朝鮮当局、すなわち自国の指導者に対する意識や価値観を考察する。まずは脱北者の証言をもとに、初代の指導者金日成と2代目金正日に対する評価の違いに注目したい。「北朝鮮が最高の国だと信じ、金日成にも心から忠誠を誓っていた<sup>16</sup>」「金日成主席は、北朝鮮にいた時は敬愛していた」「金日成を、私は幼いときから、祖国のために献身した人だと思っていた<sup>17</sup>」「金日成は神様のような存在だと信じ、敬愛していた<sup>18</sup>」といった証言が数多く見られ、金日成への評価は高いことが見受けられる。一方の金正日に対する評価を見てみると、「みんな『チビッコ』とか『精神病者』とか『天下無類の女好き』と呼んでいた<sup>19</sup>」「金正日はずるい、冷たいとの評判がある」「74年に責任ある地位に

---

<https://www.asiapress.org/apn/2020/11/north-korea/ryukou/2/>

<sup>16</sup> アエラ編集部(1995)『北朝鮮・亡命者五十人の証言』p117

<sup>17</sup> 同上 p192

<sup>18</sup> 同上 p97

<sup>19</sup> 同上 p126

ついでからなに一つやり遂げたものもない<sup>20</sup>」といった否定的な評価が多く見られた。こうした評価の違いはどういったことから起きるのだろうか。金正日の統治時代になってから生活水準が下がったことが大きく影響していると見られる。金正日が最高指導者となったのは、1994年に父・金日成の死後からであった。当時から配給制度が滞り始めており、それ以降は大飢饉によって「苦難の行軍」の時期に入ることとなる。そのため、これまで配給制が機能していた金日成時代と比較して、金正日が指導者についてからの時代は住民が食料に困るようになり、農業・工業が機能停止したことで国家の秩序が大きく乱れた。こうした時代背景によって、金正日に対する評価は相対的に低いと思われる。

続いて現在の指導者である金正恩に対する評価を考察する。まず、金正恩が後継者になると発表された2009年頃の証言を見てみよう。「今まで金正日の支配を受けてきたのだから、金正恩の支配も受けざるを得ないだろうと自嘲的な気持ちでした」「金日成も金正日も食べさせてくれなかったコメの飯と肉のスープを、金正恩が食べさせてくれるとはだれも期待していません」といった証言<sup>21</sup>から、これまでと同様の支配体制が続くのだろうという住民の諦めが見てとることができる。では、金正恩が政権に就いてからはどうであろうか。アジアプレスが2017年にインタビューした住民は、「政府が言うこと、約束するとことを信じる人はもういませんよ。騙すんです。自分たちに都合の悪いことは伝えず、問題ないと思われることだけを知らせている。だから、皆政府の言うことに関心を持たないんです。朝鮮の人々は、昔とは違いますよ。」と語る。別の住民は、「少し我慢すれば暮らしはよくなると言われて、もう何十年も経ちました。騙されたのは1回、2回ではないから、政権を信じませんよ。今、政府が私たちにしてくれることは何もない<sup>22</sup>」と語っており、金正恩に対する評価は散々である。また金持ちであることを見せつけるよう派手な服装でメディアに露出する夫人・李雪主氏への悪評も相まって、住民からは畏敬の念を持たれていないことがというのだ。

## 2. 韓国に対する住民意識・価値観

---

<sup>20</sup> 同上 p74

<sup>21</sup> チョ・ユニョン(2012)『北朝鮮のリアルー住民・脱北者の証言から読む金正恩体制の明日』p20

<sup>22</sup> アジアプレス・ネットワーク「<北朝鮮内部>40代女性に聞く核開発とキム一族の本音「もう騙される人はいませんよ」」2017.10.3

<https://www.asiapress.org/apn/2017/10/north-korea/post-55437/2/>

本節では、北朝鮮住民が有する韓国に対する意識や価値観を考察する。従来の北朝鮮住民が持つ韓国のイメージに大きな影響を与えたのは、第2章で先述した韓流ドラマの流通である。もともと北朝鮮当局は、住民に対し韓国は「アメリカ軍に占領された南朝鮮の人民は物乞いをして生活し、血を売ってまで生活している<sup>23)</sup>」と伝えてきた。小学校の教科書には、未だに米兵の靴磨きをしたり、ガム売りや新聞売りなどをして一生の家計を支え、月謝金が払えないために学校に行くことのできない韓国の「可哀想な子供たち」が登場する<sup>24)</sup>。一方の「豊かな」北朝鮮の子供たちは、金日成や金正日のおかげで誰もが学校に通い、幸せな学校生活を送っているのだと説明し、アメリカに蹂躪された南朝鮮を統一して必ず救ってやらなければならないといった教育を受ける。しかし2000年代はじめ以降、韓国ドラマが北朝鮮内で流行したことで、住民の間で韓国に対する価値観に疑問が生じた。すなわち韓国ドラマ内において、高層ビルがそびえ立ち巨大な橋がいくつもあるソウルの街並みや俳優が着こなすおしゃれな服装を観て、本当の韓国はとても豊かな場所なのかもしれないという考えを持つ人々が増加しているというのだ。事実こうした住民の認識変化は2000年代以降、北朝鮮当局が韓国を「貧困」であると取り上げることがなくなったことから見てとることができる。すなわち、韓国が比較的豊かであることを認めたのだ。しかしこうした豊かさは決して幸せなものではなく、下劣で退廃的な文化を垂れ流したアメリカ帝国主義者の支配の上で成り立っているものであるとして、韓国の人々は北朝鮮の幸せな人民を羨んでいるのだと当局は宣伝する。こうしたプロパガンダを未だに信じている人々がどれほどいるのかは不明であるが、韓国ドラマが北朝鮮内で流通してきたことで、韓国の繁栄を知る人々は間違いなく増加していることが考えられる。また近年、韓国ドラマを視聴した若者を中心に韓国のファッションやヘアスタイル、言葉の話し方などの所作を真似する人々が増えているという。市場に出回る韓国製の服は中国製の服と比べて高値で取引され、オシャレ好きな男子学生には韓国風のツーブロックマッシュヘアが人気であるという住民の供述が裏付けている。年々浸透し続ける韓国文化に対し、北朝鮮等当局は危機感を募らせているようで、昨年アジアプレスが入手した文書には、金正恩自身が「過去において、血肉関係ではない若い男女の間で傀儡の言葉を真似て『オッパ（お兄さん）』、『トンセン（妹、弟）』と呼ぶ現象が現れていることについて、何度も警鐘を鳴らしました。ところが、未だに一部の青年たちの中に、そのような言い方をする現象

<sup>23)</sup> 宮崎俊輔(2000)『北朝鮮からの大脱出 地獄からの生還』p158

<sup>24)</sup> 宮塚利雄 宮塚寿美子(2007)『北朝鮮・驚愕の教科書』p170

がなくなっています<sup>25</sup>」と述べ、韓流に対する取り締まりを強化している。こうした現象からも、北朝鮮内で韓国が北朝鮮より豊かであり、文化的にも北朝鮮の先を行っているという認識を持つ住民が増えていることが予想される。

以上、本節では北朝鮮住民の韓国に対する価値観を見てきたが、とりわけ韓国ドラマの流入が、多くの北朝鮮住民の価値観の転換に寄与したことがわかる。また北朝鮮当局におけるプロパガンダの変更や韓流に対する厳しい取り締まりからも、北朝鮮国内に韓国における情報が広まっており、住民の認識が変化していることが推察される。

### 3. 日本に対する住民意識・価値観

本節では、北朝鮮住民が有する「日本」に対する意識や価値観を分析する。多くの北朝鮮住民は、日本に対し相反する2つの価値観を抱いているという。ひとつは36年間植民地支配をした敵国という評価である。金日成が抗日パルチザンとして日本軍を破ったこと、北朝鮮という国家が日本の植民地支配を脱却し建国したことなど、金一族や国家としての正統性を主張する上で「日本」という国家は敵国に位置づける必要がある。そこで北朝鮮当局は思想教育の過程において激しい反日教育を行なっているのだ。脱北者の金起成によると、「日本は朝鮮半島の血と汗と財源を利用して大きくなったと教えられている」と説明している。また、北朝鮮の小学校の教科書には「イルチェノム（日帝野郎）」や「ウェノム（倭奴）」といった日本人を卑称する単語が度々登場し、彼らの数々の悪行が描写されている。こうした日本人が金日成や金正日によって駆逐される物語（北朝鮮では事実であると教わるらしい）が説明されている。帰国事業によって1960年に日本から北朝鮮に移住した宮崎俊輔氏は、現地の人々に「チョッパリ（日本人の蔑称）」と呼ばれていたことについて、「彼らがためらわずにそういうのは、それが侮辱する言葉だと意識していないからだ。それほど日本人というのは酷い連中だという考え方が浸透している<sup>26</sup>」と述懐しており、北朝鮮住民の間で日本に対するネガティブなイメージがはびこっていることが分かる。こうした日本を悪の象徴とした徹底した反日教育が推し進められている背景には、金日成や金正日の存在理由を肯定することで、北朝鮮住民に自国の優位性を肯定さ

---

<sup>25</sup> アジアプレス・ネットワーク「秘密文書入手 国内で韓国憎悪を煽る金正恩政権（1）「オッパは変態的」と韓流排撃を正恩氏が直接指示」2020.12.29

<https://www.asiapress.org/apn/2020/12/north-korea/kanryu/>

<sup>26</sup> 宮崎俊輔(2000)『北朝鮮からの大脱出 地獄からの生還』p74

れることであると考えられる。2016年に首都平壤では、日本の植民地支配や朝鮮戦争を経験していない新世代に日米の過去の「蛮行」を教え、復讐心を持たせる施設とされる「中央階級教養館」が開館されており<sup>27</sup>、近年もこうした反日教育は続いていることがわかる。

もう一方の評価は世界的な経済大国としての評価である。こうした評価は、在日同胞による献金や帰国同胞の生活ぶりを見て醸成されたものであると考えられる。1959年から始まった帰国事業では、多くの在日朝鮮人が日本から北朝鮮に渡った。彼らの多くは親戚を日本に残しており、そうした親戚から定期的な援助を送ってもらっていた人々が多かったという。脱北者の一人は「洋服でも家電製品でも「日本製」を持っているということは、日本に親戚のいる帰国同胞のほかは、幹部とその家族など、恵まれた一部の人に限られた特権だった」と述べており、日本製品は高級品として見なされて、日本製を身につけていることが一種のステータスとなっていたことがわかる。「帰国同胞が同窓生にいた。日本から物が届いて、きちんと着て、きちんと食べ、羨ましいほどだった<sup>28</sup>」「日本からの帰国者の子供に頼んで、日本や香港、アメリカの映画を見せてもらった<sup>29</sup>」や「在日朝鮮人の帰国者の娘がいて、日本のきれいな服を着ていた<sup>30</sup>」、といった証言からも、自国と比較した際の日本の物質的な豊かさを認識している住民が多いことが考えられる。1990年代の後半から発展した市場においても、帰国者が食料を調達するために家にあった日本製品を売っていたという事例もあり、経済大国としての日本のイメージが北朝鮮内に広く浸透していると考えられる。

以上第3章では、北朝鮮住民の北朝鮮当局・韓国・日本に対する価値観を見てきた。国内が混乱している時期に指導者に就任した金正日は、建国の父である金日成と比較すると住民からは尊敬されていないことがわかった。また現在の金正恩政権に対しては何もしてくれない政権であるとの評価を下し、生きていくためには自分たちでどうにかするしかないという諦めの感情を抱いていることが考察できる。

---

<sup>27</sup> 産経ニュース「平壤に反日・反米教育施設 新世代に復讐心植え付ける」2016.8.13  
<https://www.sankei.com/world/news/160813/wor1608130044-n1.html>

<sup>28</sup> アエラ編集部(1995)『北朝鮮・亡命者五十人の証言』p50

<sup>29</sup> 同上 p175

<sup>30</sup> 同上 p181

韓国に対する価値観や認識の転換には、とりわけ韓国ドラマの流入が大きく寄与していることがわかる。また北朝鮮当局におけるプロパガンダの変更や韓流に対する厳しい取り締まりからも、北朝鮮国内に韓国における情報が広まっており、住民の認識が変化していることが推察される。

日本に対する相反する2つのイメージが醸成された背景には、北朝鮮当局による反日教育と帰国事業によって日本から北朝鮮に移住した帰国同胞が大きな役割を果たしたことがわかる。敵国としての日本のへの価値観は、当局による反日教育を通して今後も続いていくものであると見られる。一方、経済大国としての日本への住民意識はすでにある程度は定着していると考えられる。

## おわりに

本論文を通して北朝鮮当局による統制が緩んでおり、以前と比較して徐々に北朝鮮住民が外部からの情報を得ることができるようになったことがわかった。統制が弛緩した直接的な要因は、配給制度の崩壊であった。これまで国家から支給されたモノに頼り生活していた北朝鮮住民が配給制度の崩壊によって、自らが行動しなくては餓死してしまう状況に陥ったことで市場が発展した。また国内の混乱によってあらゆる場面で賄賂がまかり通るようになった結果、中朝国境間における非公式な人とモノの往来が激しくなった。こうした市場の発展や中国からのモノの流通を通して、一部の北朝鮮住民が携帯電話や外国製テレビを媒体とした外部情報にアクセスできるようになった。こうした外部情報の流入には、少なからず北朝鮮住民の意識や価値観に変化が生じているということも明らかになった。これまで北朝鮮当局が宣伝していた韓国像はもはや虚構であり資本主義の発展を知る者、自国の貧困ぶりや異常さを相対的に客観視できるようになった者も増加したと見られる。今後も外部からの情報流入が続くと見られ、住民の意識や価値観にも変化が生じると予想される。こうした統制の弛緩や外部情報の国内流入が現体制を崩壊させ、北朝鮮住民が現在の金正恩政権の抑圧から解放されること願って、本論文の結びたい。

## 参考文献



<論文>

- ・宮田敦司(2005)「北朝鮮における国民統制の限界についての一考察」、日本大学大学院総合社会情報研究科紀要
- ・宮田敦司(2006)「北朝鮮における情報統制の手法とその崩壊」、日本大学大学院総合社会情報研究科紀要
- ・磯崎敦仁(2005)「北朝鮮住民の意識動態—忠誠心の行方」小此木政夫編『韓国における市民意識の動態』、慶應義塾大学出版
- ・石丸次郎(2016)「北朝鮮市場経済の拡大と社会変化」関西大学経済・政治研究所
- ・香川正俊(2012)「北朝鮮の政治体制と先軍政治」、熊本学園大学附属海外事情研究所

<文献>

- ・伊藤亜人(2017)『北朝鮮人民の生活—脱北者の手記から読み解く実相』、弘文堂
- ・チョ・ユニョン(2012)『北朝鮮のリアル—住民・脱北者の証言から読む金正恩体制の明日』、東洋経済新報社
- ・アンドレイ・ランコフ(2015)『北朝鮮の核心—そのロジックと国際社会の課題』、みすず書房
- ・宮崎俊輔(2000)『北朝鮮からの大脱出 地獄からの生還』、新潮社
- ・石丸次郎(2006)『北朝鮮からの脱出者たち』、講談社
- ・アエラ編集部(1995)『北朝鮮・亡命者五十人の証言』、朝日新聞社
- ・バーバラ・デミック(2011)『密閉国家に生きる 私が愛して憎んだ北朝鮮』、中央公論新社
- ・宮塚利雄 宮塚寿美子(2007)『北朝鮮・驚愕の教科書』、文春新書
- ・金起成(2004)『ボクが捨てた「北朝鮮」生活入門』、幻冬舎

<WEB>

- ・ハーバー・ビジネス・オンライン「北朝鮮の外国人留学生に与えられた“特権”とは？<アレックの朝鮮回顧録 2>」2020.1.4  
[https://hbol.jp/210006?cx\\_clicks\\_art\\_mdl=5\\_title](https://hbol.jp/210006?cx_clicks_art_mdl=5_title)
- ・アムネスティ・インターナショナル「禁じられた通信 北朝鮮における徹底的な情報統制」2016.3  
<https://www.amnesty.org/download/Documents/ASA2433732016JAPANESE.PDF>
- ・デイリーNK ジャパン「北朝鮮の若者に「USB メモリ」が大人気」2014.6.3  
<https://dailynk.jp/archives/17864>
- ・デイリーNK ジャパン「有名女優も処刑…北朝鮮「性録画物」摘発で死屍累々」  
2021.1.23 <https://dailynk.jp/archives/137194>

・アジアプレス・ネットワーク 「「愛の不時着」は北朝鮮でも流行るか 越境する韓ドラマに心揺さぶられた北の人々」 2020.11.30

<https://www.asiapress.org/apn/2020/11/north-korea/ryukou/2/>

・産経ニュース 「平壤に反日・反米教育施設 新世代に復讐心植え付ける」 2016.8.13

<https://www.sankei.com/world/news/160813/wor1608130044-n1.html>

・アジアプレス・ネットワーク 「<北朝鮮内部> 40代女性に聞く核開発とキム一族の本音 「もう騙される人はいませんよ」」 2017.10.3

<https://www.asiapress.org/apn/2017/10/north-korea/post-55437/2/>

・アジアプレス・ネットワーク 「秘密文書入手 国内で韓国憎悪を煽る金正恩政権 (1)

「オッパは変態的」と韓流排撃を正恩氏が直接指示」 2020.12.29

<https://www.asiapress.org/apn/2020/12/north-korea/kanryu/>